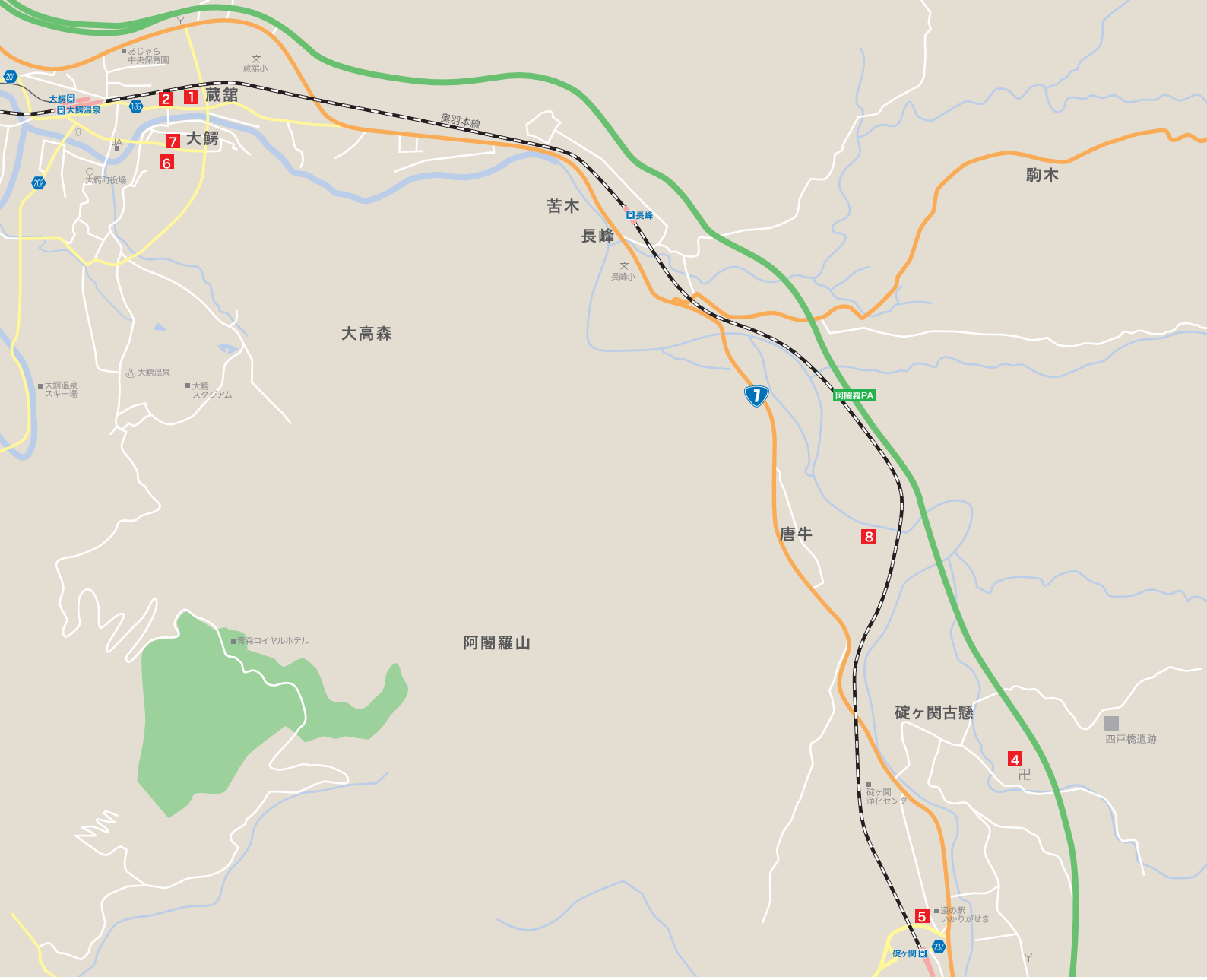

1 ヤマニ仙遊館

藩政時代の初期創業以来、大鰐温泉の歴史とともに歩んできた老舗旅館です。現存する明治30年建築の本館は太宰治・葛西善蔵などの文化人や、伊藤博文・後藤新平などの著名人らも宿泊した部屋がそのまま残っています。

2 大円寺

津軽では「大鰐の大日様」として篤い信仰を集める名所で、大日様と呼ばれる本尊は国指定の重要文化財です。奈良時代、聖武天皇の国分寺建立に際し、本尊大日如来を阿闍羅山の大安国寺に安置したことに始まります。後に大安国寺は荒廃し、建久２年(1191)、阿闍羅山千坊(せんぼう)と称された「高伯寺」(円智上人建立)に移奉されました。

慶安３年(1650)、津軽三代藩主・信義が御堂を現在の場所(大円寺のある場所)に建立、「神岡山(じんごうざん)高伯寺」と号し、高伯寺と本尊を移安した。以来、津軽家代々の崇敬を受け、江戸時代末期まで「大日様」として信仰を集めてきました。明治4年(1871)、神仏分離の際、弘前市から大円寺が移り、高伯寺の名は姿を消すことになります。

3 石の塔

早瀬野ダムより湖岸を伝って山あいへ車で15分、そこから徒歩約45分の秋田県境国有保護林内の山頂に自然現出しているものです。高さ24m、周囲74mもあり、見るものを圧倒する一塊の巨岩です。この辺りは巨岩、岩盤が多く一風変わった風景を見せています。山頂からは遠く白神山地の風光を望みます。

4 古懸山国上寺

推古天皇の時代に聖徳太子によって、阿闍羅山に建立されたとされ、奉った不動明王は、座っている姿から「ねまり不動」とも呼ばれ、津軽三不動の一つに数えられています。

5 碇ヶ関御関所

津軽(大浦)為信が天正14年(1586) に秋田比内の浅利氏を攻め、帰陣する時に当地に関所を設けたことから、それまで碇ヶ岡という地名を碇ヶ関という名に改めましたと伝えられます。後年、幕府の巡検使の随行記録には「厳重なること箱根の関所も及ばない」と記録されています。道の駅いかりがせき敷地内に、当時の様子を再現した御関所資料館があります。

【御関所太鼓】

貞享２年(1685) に、四代藩主津軽信政の御前で、関所と後本陣の落成を祝い、併せて長寿と豊年を願って太鼓を打ち鳴らしその喜びを表したといわれています。その後、昭和59年４月に関所が復元されたのを機作られ、御関所太鼓が誕生。

6 茶臼山公園

爽やかな初夏の風がそよぐ５月の下旬、大鰐町を見下ろすこの公園には色鮮やかなつつじが全山に咲き乱れます。20数種類、総数約１万5000本以上を数えるつつじの名所となっています。また、300種類を超える植物が育成しており、わずか30分足らずでこれらを観察できる茶臼山自然植物園も併設されています。また、69の俳句を刻んだ石が山頂へと導くように立ち並ぶ遊歩道「俳句の小径」があります。

7 湯魂石薬師堂

文禄２年(1593)弘前藩を開いた津軽為信公が眼病にかかり、「大鰐の湯で目を洗えば治る」という薬師如来のお告げを夢に見て、大きな石の下から湧き出る熱湯を発見したと伝えられています。為信は感謝の意を込め、この大石の上に祠を建立し「湯魂石薬師堂」と名付けました。

8 唐牛城址

築城年代は不明。国道７号の工事にともない破壊され、郭の一部と空堀を残すのみだが、津軽一統志に「唐牛多田釆女」とある。二代釆女が初めて津軽為信に仕えたという。館の上にある唐牛熊野宮は江戸時代までは観音堂であり、城の守護神であったと思われる。創建は不明であるが、寛永10年(1633)に再建、明治初め神仏分離で現社名に変更した。

◇大鰐の地名の由来

はるか昔、大きな阿弥陀如来像があることから大阿弥陀と呼ばれていたが、大阿弥・大阿尓(おおあみ：大きな阿弥陀仏)が大阿子(おおあね)となり、室町時代を経て、大安国寺(おおあに)、大姉(アネ＝アイヌ語で森林がある谷間)と変化し、大浦為信の津軽独立以降は、「大鰐」(大きな山椒魚(サンショウウオ)＝鰐が棲んでいた伝説がある)と記されるようになったと伝えられています。